



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	寄宿舎併設病弱特別支援学校における発達障害児の教育的支援( fulltext )
Author(s)	小野川,文子; 高橋,智
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 64(2): 115-121
Issue Date	2013-02-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/132638">http://hdl.handle.net/2309/132638</a>
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

## 寄宿舎併設病弱特別支援学校における発達障害児の教育的支援

小野川 文子\*・高橋 智\*\*

特別支援科学講座

(2012年9月14日受理)

### 1. はじめに

病弱特別支援学校に在籍する児童生徒は、心身症をはじめとする精神疾患に加え、広汎性発達障害、アスペルガー症候群、多動障害といった発達障害が増えている。また反応性愛着障害、適応障害、強迫性障害、摂食障害といった二次障害と思われるものも増えている。多くが通常学校において学習面・行動面での不適応から不登校となり転入してくるケースが多い。

鈴木・武田・金子(2008)の調査によると、全国の病弱特別支援学校(中学部・高等部、以下同じ)におけるLD・ADHD等で適応障害のある生徒の在籍状況は全学校の60.5%、生徒数においては11.4%としており、「3年間でほぼ倍増している」と指摘している。また加茂・東條(2010)は、発達障害と不登校の関連に関する調査・研究の動向をまとめ、「通常の学校で発達障害児が学校不適応、不登校などをおこし、対応できないケースが、特別支援学校に転入している実態が見えてくる」として、病弱特別支援学校への増加理由を述べている。

例えばA特別支援学校では、2011年度の転入者6人中4名(66.7%)が発達障害であり、そのうち全員が転入前は不登校状態であった。また転入者全員が、二次障害と思われる心身症、精神疾患を併せ持っていた。さらに「通常学校に在籍することの多い軽度発達障害児は、学校環境に適応できず、不登校に陥る危険性が一般の子どもより高い」(近藤・氏家・松木:2002)という指摘もあり、不登校の子どもの中に知的遅れのないアスペルガー症候群等の広汎性発達障害

の子どもが多く存在している可能性があり、不登校児への対応も発達障害を意識した支援が求められている。

一方で、寄宿舎併設の病弱特別支援学校の実態としては、近年の社会状況を反映し、様々な困難の事情を抱える家庭が増えており、医療機関や子ども家庭支援センター、児童相談所との連携が必要なケースも多くなっている(木村:2010)。B特別支援学校では平成23年度在籍児童生徒の4人に1人が「心身症、精神疾患」があり、半数以上が「不登校」を経験している。特に注目すべきは、小学校・中学校での「不登校」は76.6%を占め、3割以上が「発達障害」「心身症、精神疾患」があり(図1)、その背景には「失業・家庭の経済貧困」「保護者の精神疾患・発達障害」「養育放棄」「DV・虐待」等の深刻な状況がある。児童相談所からの入学相談・学校見学が頻繁に行われ、子どもにも保護者も「最後の行き場所」となっている。

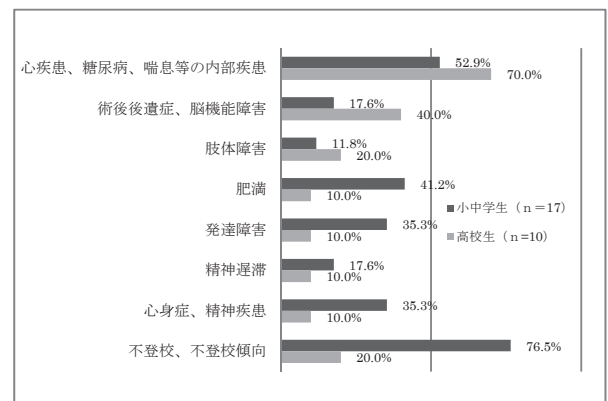


図1 B病弱特別支援学校平成23年度在籍児童生徒の病気・障害 学部比較(複数回答)

\* 東京都立久留米特別支援学校  
 \*\* 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

このように通常学校・学級に在籍する多くの発達障害の子どもが障害に応じた十分な教育的支援が受けられず、学習面や生活面において多くの不適応問題を有している。また発達障害児の家庭の問題も少なくなく、保護者を含めた支援も不可欠となっている。これまでもさまざまな教育的支援がなされてきたが、未だ不適応や二次障害のある発達障害の子どもへの対応が十分とは言えない。

本稿では、寄宿舎併設病弱特別支援学校に不登校状態で転入してきた広汎性発達障害児の事例から、発達障害児の生活と発達の困難に対し、どのような教育的支援が必要なのかを明らかにする。

なお本稿で取り上げた事例は、筆者らの所属先とは無関係であり、筆者らのこれまでの数多くの寄宿舎教育の調査研究において入手した複数の典型的事例を組み合わせたものであり、個人情報保護・研究倫理上の配慮を行っている。

## 2. 「広汎性発達障害」と想定される子どもの事例

### 2. 1 入学前（小学校）の状況

Cは小学校4年生の時、お漏らしをしたことがきっかけで頻尿気味となり、トイレに長時間こもるようになった。心療内科に週1回通い、服薬で頻尿は落ち着くが、小学校5年生から登校しぶりが始まり不登校状態になった。その後、学校へ行きたいのに行かない自分に落ち込み、泣いて引きこもるようになった。何度か適応指導教室に通うが、最初は過剰に適応しようと頑張るが続かないことをくり返していた。

発達検査では、知的には正常、下位検査にはばらつきがあり、特に聴覚系の弱さが指摘されていた。入学時の調査票には「相手の思いを考えずに自分の思ったことを言う」「自分の思い通りにいかないと泣き出してしまう」とあった。

Cは週1回発達支援センターに通い、遊戯療法を受けていた。発達支援センターからの書類には愛着関係が課題と記されていた。母親も精神科にかかっており、Cの対応にかなり苦勞している様子が伺えた。小さい頃はかなり厳しく育てたようだが、思春期になると関係が逆転し、ナイフを振り回すこともあった。母親は悪いと思っても本人要求を断れないと言う。

心療内科の主治医からは「集団生活は難しい」「勉強は二の次」「人の中にいることが辛かった人なので、ある程度人といわれた方がいい」との助言を受けた。

Cは寄宿舎生活を見合わせ、通学生として無理のない範囲で放課後は寄宿舎で過ごすこととなった。とく

に広汎性発達障害という診断はされていなかったが、Cの状態から「広汎性発達障害」としての指導、対応が求められるケースであった。

### 2. 2 気になる行動

#### 2. 2. 1 入学当初の急な飛び出し、危険な行動

弁当持参で午後の授業に少しずつ参加できるようになった5月、保健室に行った後、行方不明となり、学校の裏山で発見された。職員に気づくと校舎と裏山の塀に登り、連絡を受けて駆けつけた母親から「危ないから降りよう」と言われると「飛び降りたいの」と言った。母親と教員の説得後、後ろを向いて自分の手を噛み「すっきりしたから降りる」と言って降りてきた。

その後の聞き取りの中で、「英語の時間に先生の発音と（本人が習っている）英語の先生の発音が違っていることが気になり、辛くなってしまった」「保健室で休もうと思って行ったが、理由を聞かれ、そのことが『元気なのに何で休むのか、結局あんたが悪いんでしょ』とされているように感じた」とCは答えた。手を噛んだ理由については「身体を傷つけないと心が痛いから」と説明した。

その後も何度か学校を抜け出したり、授業に入らず廊下をうろうろしているうちに階段の吹き抜けから飛び降りようとしたりして、常に目が離せない状況だった。また「校長先生は何も分かってくれない」と言って校長室のドアや壁を蹴り、「頑張って学校きているのに分かってもらえない」「私だって死にたいと思って内緒で自分の首を絞め、顔が赤くなって安心した」など話した。

ルールに対する理解では、学校で禁止されている携帯電話やヘヤースプレーについて説明されると「ダメなんだ」と言った後、「気分が悪くなった」と言ったまま行方不明となり、寄宿舎の空き居室のベランダに隠れて出てこなかった。Cの主張は「スプレーは髪型を変えるのに必要」「携帯は母親に電話できないので自己責任にしてほしい」ということだった。また「もやもやとなったら人に話せない。話そうとしたら辛いときのことが思い出され言葉が出てこない」とも話した。自分の思いや要求と違うと、自分の気持ちが処理できず飛び出しや危険な態度をとってしまう。Cは「高いところは好きなのではなく、必要」と自分の気持ちを主張した。

#### 2. 2. 2 頻繁におこる「過呼吸」

入学当初、何度か過呼吸が見られたが、中学2年に

入ってからは危険な行動は減ったものの、何かのきっかけで不安定になり、過呼吸を頻繁に起こすようになった。地域校訪問の出発直前、周りがみんな制服の中、自分だけが体操着だった。Cは直ぐにトイレに行き緊急ブザーをならした。駆けつけるとトイレで過呼吸を起こしていた。

また授業でのランニング中、スタート直後にトイレに行き、2階から険しい表情でみんなのランニングを見下ろしていた。「みんな頑張っているから走らないといけない。走りたいけど走れない」という気持ちを泣きながら教員に話した。寄宿舎の卓球サークルでも、サーブがうまくいかず1人で退出し、寄宿舎看護室に避難することもあった。

友だち関係でも彼女のストレートな言い方等から、女子全体から陰口を言われるようになり、やや素っ気なくされるようになった。そのような女子の行動を感じるようになったCは、やはり過呼吸を起こしていた。またCは積極的に女子組の代表委員や係りに立候補するが、友だちからの支持が得られない時にも必ず過呼吸を起こしていた。

### 2. 3 気になる行動への対応とAの変化

急な飛び出しや危険な行動に対しては、自分なりの主張があることから、落ち着ける場所として、学校では相談室の棚の上、寄宿舎では掃除道具入れのロッカーの上は登ってよいことにした。また、1人になりたいときに行く場所も本人と確認した。その後、Cは辛くなったときは認められている場所に行ったり、保健室で休むことができるようになり、飛び出しなどの危険な行動は少なくなった。

しかし中学3年生になり、再び飛び出しが見られるようになった。1回目は、新しく赴任された先生と意見が食い違って飛び出した。2回目は、テストの答え合わせをしているとき飛び出した。Cは「もう無理」「外へ行っていいですか」と告げ、しばらく外を歩いた後、「お騒がせしました」と学校へ戻り、通常通り授業を受けることができた。Cは「心配かけるから必ず先生が気づいているのを確認して出ている」と言っていた。

中学2年生になって頻繁に見られるようになった過呼吸については、徐々に「給食前」の空腹時、「特定の友だちが近くにいる時」といった友だちとの関係の中で多いことが分かってきた。また、過剰に回りの反応を気にして、「自分を認めてもらえていない」と感じたときに起こるように思われた。主治医から「過呼吸に対して周りが過剰に反応しないように」との助言

も受け、教員や寄宿舎指導員はある程度状況を把握しながら、過呼吸になっても冷静に対応することを確認した。

中学2年の2学期、つきあっている異性とべたべたしていることを友だちからストレートに指摘されることがあった。少し落ち込む様子は見られたものの、その後職員には「友だちからそんな風に見られていたんだ」と話し、家に帰ってから母親に「これから待ち伏せしたりしない」などはじめて自分の行動を見直し、母親は驚いたようである。「私が何度も態度について説明してきたけれど理解できなかったのに、友だちの力って大きいですね」と母は話した。

その頃、ほとんど過呼吸はみられなくなっていた。10月、学校祭に向けた太鼓練習では太鼓をうまくたたけずやや険しい表情になるが、その場を離れることなく最後まで練習することができた。少しずつみんなの中で、自分の気持ちを調整できる力を付けつつあることや、友だちから気持ちを聞くことを通して、他人がどのように思うのかということも経験を通して理解しつつあるように思われた。

### 2. 4 困難と言われた「寄宿舎生活」

Cは中学1年の頃は授業に参加することも難しく、2年になっても登校は毎日10時を過ぎていたが、3年になると1時間目から登校できるようになった。過剰に適応しようと頑張り、挫折をくり返していたことを心配し、教員と寄宿舎指導員の間で丁寧な引き継ぎと見守りの姿勢に徹した。

一方で「寄宿舎に泊まれている負い目」を感じていた。「友だちがどんな生活しているのか分からない。だから話にもついていけない」と言い、とても気にしている様子が見られ、活動参加を遠慮することも多かった。そこでCが中学3年生になったところで、寄宿舎に泊まりたい気持ちを確認し、4月末から週1回寄宿舎に泊まることになった。家庭には調子が悪くなった時を想定し、いつでも迎えにこられるよう待機してもらった。

Cは寄宿舎の日課も意識し、ルールのある集団生活を送る姿から、過剰に適応しているように思われたが、そのまま様子を見ることにした。Cは難なく週1泊を3週間続けることができ、週2泊へと進めた。週2泊はあえて連続した泊まりを設定し、宿泊を水、木とした。Cは職員の心配をよそに、2泊も全く変わらなく生活することができた。母親には「きつとかなり頑張って2泊生活したと思われる」「Cに限らずみんな家庭ではわがままになったり甘えたりするので、心



配なさらぬように」と話しておいたが、翌週、母親から「先生から助言もらっていたので、干渉しないで見守りました。いつもと変わりませんでしたよ」と聞かされた。

自分の思いや要求と違ふと、自分の気持ちが処理できず飛び出しや危険な態度をとっていた中学1年時、中学2年の頃は過呼吸を頻繁に起こしていたCだったが、中学3年になると危険な行動も過呼吸もほとんど見られなくなった。

5月、Cは寄宿舎での外出に関するルールを変えて欲しいと主張してきた。外出先は近所の本屋とCD/DVDのレンタル店に限られていたが、Cは「100円ショップ等のある近くのショッピングモールも外出先と認めて欲しい」と訴えてきた。管理職の意見もふまえ職員で検討した結果、「認められない」結論となった。話し合いの中で「認められない理由」を丁寧に説明した。説明を聞いている時のCはやや表情が硬く飛び出す危険性も感じられたが、説明が終わると「そうだよね。誰かがたくさんお小遣いもっているものを買うことでなくても、買えないお友だちがいたら嫌なものね」といくつかあった理由の中からCなりに納得できた理由を言葉にした。自分の経験から友だちの気持ちを推測し、自分で折り合いをつけた瞬間だった。

週2泊を3週間クリアした6月、修学旅行に参加した。これまでバス、電車等の公共交通機関にも乗れず、自家用車で現地集合していたCだったが、今回はバス・電車を利用し、車内でも笑顔を見せていたという。6月末からは週3泊となり、寄宿舎では過呼吸や飛び出しもなく夏休みを迎えた。Cによると「過呼吸が起こりそうな時はあったが、大丈夫だった」と言っていた。

Cは目標を設定することに抵抗がある。目標が達成されないと「できなかった自分」を責めてしまうようである。だから「先生が決めて」という。しかし、Cには「できない自分」も含めて受け入れられるようになって欲しい、そのために宿泊数を増やしていくことも無理せずクリアしていけるよう、本人の気持ちを丁寧に確認しながら進めるよう配慮した。

### 3. 発達障害をもつ子どもの発達と生活の困難

#### 3.1 発達障害への理解・支援の困難

発達障害を有する子どもは、通常学校において学習面・行動面での不適応から不登校となるケースが多い。不登校となって発達障害が明らかになる場合も少なくない。Cの事例では、発達障害の障害特性を配慮

した教育的支援が必要とされていたが、実際には十分な理解と支援が行われなかったと思われる。学校では本人なりに頑張っていたが適応できず、徐々に身体症状に表れ、不登校状態を引き起こし、学習の遅れにつながっている。週1回の発達支援センターでの遊戯療法や心療内科でのカウンセリングも受け、心理面でのケアは行われていたが、Cの不適応は改善されなかった。適応指導教室も通ったが、かえって失敗経験を増やしてしまった。従来の不登校対応では不十分だったと言える。

家庭においては、両親は一生懸命子育てしてきたに違いない。幼少の頃はかなり厳しく育てられたようだが、両親の思いに届かれない、うまくできない自分を感じ、親子関係に支障をきたすようになったと考えられる。発達障害児においては「子ども理解」や「子育て」の難しさが指摘されているが、子育ての責任は主に母親が担っており、母親への負担は大きい。母親の養育態度が子どもの情緒面に大きく作用する。つい過干渉になったり、厳しく躰たりすることによって親子関係が崩れ、子どもの発達に重大な影響を与えることになる。Cの実態、生きづらさを理解し、早い段階から必要な配慮や支援を行い、家族に対しても必要なアドバイスが求められたケースである。近藤・氏家・松木(2002)は「子どもが不登校のほかには発達障害をもっている場合には、家族支援に特別な困難が生じる場合がある」とし、家族が発達障害に対して理解していくことの困難さを指摘している。

また、原田・松浦(2010)は学習面や行動面で著しい困難を示す児童生徒が不登校となったきっかけとして、「こだわりやパニック、環境変化への不適応といった発達障害やそれが疑われる児童生徒に特徴的なきっかけが挙げられる一方で、家族関係や生活習慣と言った家庭の中での課題がきっかけとして最も多く挙げられている」と述べ、家庭生活の問題が子どもの行動に大きく影響を与えていることを指摘している。このように不登校や二次障害のある発達障害児において家族に対する支援は不可欠と言える。

#### 3.2 自己形成の困難

広汎性発達障害は人との関係を築いていくことに困難があると言われている。とりわけ同年代の友だちとの関係性の困難は、自己を確立していく上で大きな影響を与えていると思われる。

岡田(2009)は「中学時代は仲良しグループ(チャム・グループ)が形成され、家族に向けていた自分の理想を友人に向け始める。共通した言語や価値観が求

められ、仲間に対する忠誠心が生じてくる。アスペルガー症候群の子どもたちは、他者への興味や感情に無関心で、彼らの独特な世界観を他者が共有することも困難であり、排除され孤立していく可能性が高い」として、思春期の時期の困難さを指摘している。

親ではなく同年代の仲間の中で客観的に自己を見つめ直し、自分づくりをしていく時期に、他人とは異なった価値観や行動様式をもつことで、集団から排除され孤立していったとしたら、どのように自己を認識するのか。自己に対する肯定的感情が低下し、常に自信がない不安定な自己のまま生きることになるのではないか。

Cは「人一倍相手の気持ちを考えようとしている」反面、「自分だけの解釈で判断してしまう」ことで周りとのズレを生み、そのことでの自信を失い、常に人との関係で不安を感じているように思われる。多くの人が共有する感覚や行動様式の中ではなかなか自分を受け入れてもらえず、安定した自己を確立できずにきたのかもしれない。その不安が危険な行動や過呼吸といった形で現れていたように思われる。このように他者とは違う価値観や行動様式をもつ発達障害の子どもは、自己形成に大きな困難があると予測される。だからこそ「ありのまま受け入れられる」仲間の存在やさまざまな経験を通して自己理解を深めていくことが大切だと思われる。

#### 4. 発達障害児に必要な支援

##### 4. 1 発達障害への理解と早期対応：二次障害を防ぐ

今日、通常学校・学級に発達障害の子どもが多く在籍し、十分な教育的支援を受けられずに心身症・精神疾患等の二次障害をはじめ、不登校・不適応となっているケースも少なくない（鈴木：2008、近藤・氏家・松木：2002）。通常学校・学級においては専門機関との連携を図りながら、早い時期からの対応が求められる。さらに発達障害家庭においての「子どもの理解」「育てにくさ」といった家族の困難さを考えると、福祉との連携も不可欠である。

そのため病弱特別支援学校が通常学校で適応できない子どもや家庭事情のある子どもの受け皿となっている。しかし、「受け皿」としての病弱特別支援学校ということだけではなく、通常学校に在籍する病弱教育を必要とする子どもに対して就学相談や就学支援を行うことや医療や福祉とつなげていくセンター的役割を担う学校として位置づける必要がある。

##### 4. 2 自己の確立を支える

発達障害の子どもは他人とは違う価値観や行動様式ゆえに、人と関係を築いていくことに困難さを抱えている。友だちとの関係性の中で自己を確立していくことを考えるならば、発達障害がどう友だちの中で関係を築いていけるのか、それをどう支援していくのが重要である。

しかし日本の現状では、40人学級体制の中で発達障害あるいはその疑いのある子どもを集団が受け入れ、認め合う関係を築いていくには大きな困難が予測される。どうしても行動を矯正し、集団に適応させることを求めてしまう傾向が強い。しかし、発達障害児からみれば、「適応」は自己の否定につながりかねない。人とは違う価値観や行動様式を認めあいながら、違う人間同士がどのように関係を築いていくのが指導する上で重要である。そのためには、大人数より少人数の方が集団形成しやすい。

また、共通の価値観や行動様式をもった発達障害児同士の関係もプラスに作用する場合もある。Cは同じ広汎性発達障害のDと行事で同じ発表係りを受け持ったことがある。Cがまじめに話し合いや練習をしているとDが漫画を読んで協力しない、Dがまじめに係りの仕事をしているときはCが協力しない。それぞれが勝手に行動しているが、しかし互いに不満を言うわけでもなく受け入れているのである。周りの友だちもそんな「いい加減な2人」を受け入れ、練習に応じている。

寄宿舎ではそれぞれの違う生育歴、文化の中で育った者同士が、認め合いながら生活していくのである。同じ到達目標を要求される学校では、発達障害の子どもたちは「自分だけが違う」ことが強調されやすいが、それゆえに寄宿舎において生活を共にする経験が有効に働くことも多い。

一方、医療的対応が必要なケースが小集団に存在すると、精神的不安要素をもつ子ども集団ではマイナス作用を引き起こすことも多い。そのような場合は限界領域（枠）を作りながら、適度な距離間を保つなどの配慮も必要である。そうした配慮を教育的に組織していく教職員の存在は大きいと言える。

二次障害のある発達障害児にとっては、特別支援学校の役割は大きく、関わり合う集団のある寄宿舎生活の意味は大きい。鈴木・武田・金子（2008）によると、病弱特別支援学校において「85.5%のLD・ADHD等で適応障害のある生活の状況が『かなり改善』『一部改善』されていると担任が考えている」「登校状態にも大幅な改善が見られている」と述べ、不適

応を有する発達障害児に対して病弱特別支援学校が有効な場となっていることを指摘している。

## 5. おわりに

本稿では、寄宿舎併設病弱特別支援学校に不登校状態で転入してきた広汎性発達障害児の事例から、発達障害児の生活と発達の困難に対し、どのような教育的支援が必要なのかを明らかにしてきた。

事例のように、発達障害の子どもが無理解や支援の不十分さから、学習や生活上の困難を抱え、通常学校で不適応状態となって不登校・二次障害を引き起こし、特別支援学校へ転入してくるケースが増えている。そうなれば、不登校・二次障害を伴う発達障害児に対する教育は、医療との連携が不可欠となり、病弱特別支援学校は大きな役割を果たすことになり、Cの事例からもそのことが示唆される。

武田(2012)が「発達障害の二次障害のうち、医療を必要とする児童生徒たちは、病弱教育の対象となっべきである」と述べているように、病弱教育の対象としても位置づける必要がある。

発達障害のある子どもは「自己理解」「自己確立」に困難があることが伺える。言うまでもなく「自己理解」を深め、自己を確立していく上で、他者の存在や関わりは重要である。となく発達障害児の教育は、その障害特性から個別指導や適応指導が重視されやすい。しかし、適度な集団の存在が教育的に用意され、他者との関わりの中で自己理解を深め、自己肯定感を高め、安定した自己を確立していく支援が求められている。

## 文献

加茂聡・東條吉邦(2010) 発達障害と不登校の関連と支援に関する現状、『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』59, pp.137-160。  
 木村由美(2010) 心身に悩みをもつ子どもたちを受けとめて、『障害者問題研究』38(3), pp.51-56。  
 国立特別支援教育総合研究所(2010) 小中学校に在籍する「病気による長期欠席者」への特別支援教育の在り方に関する研究—子どもの病気と教育の資源の実態把握を中心に、『研究成果報告書(平成20～21年度)』。

近藤隆司・氏家靖浩・松木健一(2002) 発達障害を疑う不登校児への教育的支援、『特殊教育学研究』39(5), pp.17-23。  
 岡田之恵(2009) 不登校と特別支援教育、『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』12, pp.1-9。  
 小野川文子(2009) 調査に見る障害児の生活の貧困—特別支援学校寄宿舎から見える障害児家庭の貧困—、『子どもの貧困白書』明石書店, pp.141-143。  
 小野川文子(2010) 特別支援学校寄宿舎から見える障害児の「生活の貧困」、『障害者問題研究』37(4), pp.293-299。  
 小野川文子・高橋智(2007) 障害児とその家族の生活問題と養護学校寄宿舎教育の役割—ある重度重複障害児への生活教育実践から—、『東京学芸大学紀要(総合教育科学系)』58, pp.235-244。  
 小野川文子・高橋智(2008) 特別支援学校寄宿舎教育の現代的機能と役割—養育困難のある重度重複障害児への生活教育実践から—、『SNEジャーナル』14(1), pp.162-176, 日本特別ニーズ教育学会。  
 小野川文子・高橋智(2010a) 全国寄宿舎併設特別支援学校(肢体不自由)の教職員調査からみた寄宿舎教育の役割と課題、『学校教育学研究論集』21, pp.79-95。  
 小野川文子・高橋智(2010b) 全国寄宿舎併設特別支援学校(肢体不自由)の保護者・教職員調査からみた寄宿舎教育の役割と課題、『障害者問題研究』38(3), pp.79-95。  
 Onogawa Fumiko, Takahasi Satoru(2011) Study on Roles and Problems of Boarding Houses Education at Schools for Special Needs Education (Physically Disabled) from Viewpoint of Investigation into Parents of Children with Physical Disability Residing in Boarding Houses, 『学校教育学研究論集』23, pp.29-44。  
 小野川文子・高橋智(2011) 肢体不自由特別支援学校在籍の児童生徒とその家族の生活実態の検討—都立肢体不自由特別支援学校の保護者調査から—、『SNEジャーナル』17(1), pp.174-189。  
 小野川文子・高橋智(2012) 病弱特別支援学校寄宿舎における子どもの多様な「発達と生活の貧困」の実態と教育支援、『SNEジャーナル』18(1), pp.148-161。  
 鈴木滋夫・武田鉄郎・金子健(2008) 全国の特別支援学校<病弱>における適応障害を有するLD・ADHD等生徒の実態と支援に関する調査研究、『特殊教育学研究』46(1), pp.39-48。  
 武田鉄郎(2012) 病弱教育の現状と今日的役割、『障害者問題研究』40(2), pp.27-35。

# 寄宿舎併設病弱特別支援学校における発達障害児の教育的支援

## Special Needs Education for Students with Developmental Disabilities who have Truancy or Maladaptive in Special Needs Schools installed Boarding House for Students with Sickness

小野川 文子\*・高橋 智\*\*

Fumiko ONOGAWA and Satoru TAKAHASHI

特別支援科学講座

### Abstract

Many students with developmental disabilities enrolled in regular schools and classrooms do not receive sufficient educational supports in response to developmental disabilities. In their learning and life, they have a lot of problems maladjustment. Families of students with developmental disabilities face a lot of problems, it is essential for the support of their parents and families. Various educational supports have been made in the past, supports for students with developmental disabilities who have truancy or maladaptive are insufficient. In this paper, we have examined the case of children with pervasive developmental disabilities, which had been moving in special needs schools installed boarding house for students with sickness. We have revealed what is necessary educational support for problems of life and development that children with developmental disabilities have.

**Key words:** Special Needs Schools Installed Boarding House, Special Needs Education for Students with Sickness, Developmental Disabilities

*Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan*

**要旨:** 通常学校・学級に在籍する多くの発達障害の子どもが障害に応じた十分な教育的支援が受けられず、学習面や生活面において多くの不応問題を抱えている。また発達障害児の家庭の問題も少なくなく、保護者を含めた支援も不可欠となっている。これまでもさまざまな教育的支援がなされてきたが、未だ不応や二次障害のある発達障害の子どもへの対応が十分とは言えない。本稿では、寄宿舎併設病弱特別支援学校に不登校状態で転入してきた広汎性発達障害児の事例から、発達障害児の生活と発達の困難に対し、どのような教育的支援が必要なのかを明らかにした。

**キーワード:** 寄宿舎併設特別支援学校, 病弱教育, 発達障害

---

\* Tokyo Metropolitan Kurume School for Special Needs Education

\*\* Ph. D., Professor of Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)